

研究報告

看護教員に焦点を当てたリフレクション研究に関する考察

A Study of Reflection Research Focused on the Nursing Educator

寺田 智美 棚橋 泰之 池谷 理江

Tomomi TERADA, Yasuyuki TANAHASHI, Rie IKEYA

(神奈川歯科大学短期大学部 看護学科)

キーワード：看護 教員 リフレクション 研究

I. はじめに

教育哲学者であるJ. デューイ¹⁾は「リフレクションは、人が学習するという、あるいは個人的成長をするための中核をなす」ものであり、「経験における熟慮」であると説いている。それは「経験の中から生まれる知識はあるが、人はなかなかそれに気づかないために、意識して経験を積んでいくことによってその知識に気づき、身につけていくことができる²⁾」と説明されている。看護師は、常に変化し続ける対象と関わり、実践の中で直面する複雑な課題に対応している。そのような実践の基盤となる思考の仕方がリフレクションである。このリフレクションという概念は、1930年代に考えられた概念であるが、現在まで脈々と継承されている。

欧州ではリフレクションの看護教育への導入は一般的であり、わが国においても教師教育の分野で広く浸透していると報告されている³⁾。教師が自らの教授活動を振り返り、捉え直す省察が有効であると考えられ、初等・中等教育で盛んに行われてきている。大学教育においても教員の省察の重要性が注目されるようになりFDプログラムの中でも教員の省察を促すような実践が実施され、それを支援するツールや手立てが紹介されてきている⁴⁾。

一方で、わが国の看護の視野からリフレクションを捉えると、リフレクションに関する研究の動向は3編の報告である。藤井・田村⁵⁾は、1983年から2007年の間に発表されたリフレクションに焦点を当てた研究の動向を報告している。そこでは67論文を研究対象としリフレクション研究を概観している。上田・宮崎⁶⁾は、1983年から2010年の間に発表された看護実践のリフレクションに関する国内文献の検討を報告している。そこではリフレクションの内容やリフレクションによって期待される看護実践の効果を17論文から検討されている。高橋・嘉

手苅⁷⁾は、2014年までの間に発表された看護基礎教育の技術演習における学生のリフレクションに関する国内文献の検討を報告している。そこでは19論文を研究対象とし看護技術習得過程においてリフレクションがどのような意味をもつかという観点から内容分析が行われている。以上からリフレクションに関する研究の動向として、2007年以降の研究について分類整理が十分になされていないこと、看護師や看護学生を対象にしたリフレクションに関する検討は少なからずあるが、看護教員に焦点を当てた研究に関する分類整理がなされていないことが明らかとなった。

そこで、看護教員自身の看護教育実践のリフレクションに関する文献を整理し、看護教員自身のリフレクションの実践及び看護教員のリフレクション研究において今後取り組むべき課題を明らかにすることを目的に本研究に取り組んだ。そのことで看護教員がリフレクションを実践し、専門職として成長するための望ましい前提条件を整えていくことができるものと考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は、看護教員自身による看護教育実践のリフレクションに焦点を当てた国内文献を対象に、そこで行われているリフレクションの内容とその効果について検討することである。

III. 用語の定義

リフレクション：人が自身の経験を捉えなおし、経験の中から生まれる知識である。リフレクションを通して、過去の経験を肯定的に捉えられるようになり、自信や人の成長を促す。

受付日 2015年11月30日

受理 2016年1月28日

IV. 研究方法

1. 看護学領域におけるリフレクション研究の動向に関する論文の抽出

文献レビューは、Web版医学中央雑誌Ver.5を用いて、2015年11月に実施した。看護学領域におけるリフレクションのこれまでの研究の動向を明らかにするために、1983年～2015年を検索期間とし、「リフレクション」、「看護」で国内文献を検索した。その結果526件の研究の存在が明らかとなった。上記論文のうち、本研究の目的と文献の要旨を概観した結果、「結果のみにリフレクションが記載されているもの」8件、「ケーススタディー」1件、「高齢者対象」1件、「介護者対象」2件、「介護職員対象」1件、「動物看護学生対象」1件、「介護養成課程対象」1件の計15件を除外した511件の研究論文を抽出した。

2. 看護教員を対象とした研究論文の抽出と選定

本研究は、看護教員を対象とした研究に着目しているため、医学中央雑誌Ver. 5に納められている全期間（1983～2015）において先に抽出した511件から更に「教員」をキーワードに、原著論文で絞り込み32文献を抽出した。原著論文に研究対象を厳選したのは、研究目的が明確で、研究デザインが研究目的を明らかにする上で適切であること、客観的なデータをもとに分析をしており、研究としての完成度が高く、比較検討がしやすいためである。

次に、絞り込んだ研究論文をリフレクションの対象別に分類を行った。「学生」8件、「教員」14件、「教員研修を受けた教員」2件、「教員と学生」4件、「教員と学生と臨床看護師」1件、「教員と臨地実習指導者」1件、

「その他（臨地実習指導者、教員と教育実習生など）」2件であった。看護教員自身の看護教育実践のリフレクションは、「教員」「教員と学生」「教員と臨地実習指導者」に分類され22件が存在した。そこから研究目的である教員が実践したリフレクション並びにその効果を明らかにするため、上記条件を検討した結果9件であった。

質的研究の経験がある本研究者3名が22件の研究論文を熟読し、上記条件を満たしている文献を検討した結果、9件に絞り込まれ、本研究者3名が合意した研究論文9件を最終的な分析対象とした。9件の研究論文についてマトリックス形式を用いて、年代の新しいものから年代順に、7トピック（著者、テーマ、研究目的、研究方法、研究結果、雑誌、発表年）でまとめた。

V. 倫理的配慮

文献からの引用は原典から行い、引用した文献の出典は正確に提示した。データ収集・分析は、文献の整理・分析の過程を示し、共同研究者間で検討することで、公正に真実性を持って行った。

VI. 結果

1. 看護学領域のリフレクションに関する研究の動向

看護学領域のリフレクションに関する研究論文数を図1に示した。論文数は、1998年に5件が初めて登場し、2006年までは年間3～13件で推移していた。2007年度以降、急速に研究論文数が増加し、2012～2014年には年間59～80件とピークに達している。2015年は、11月までの結果であるが、年間42件と減少に転じている。（図1参照）

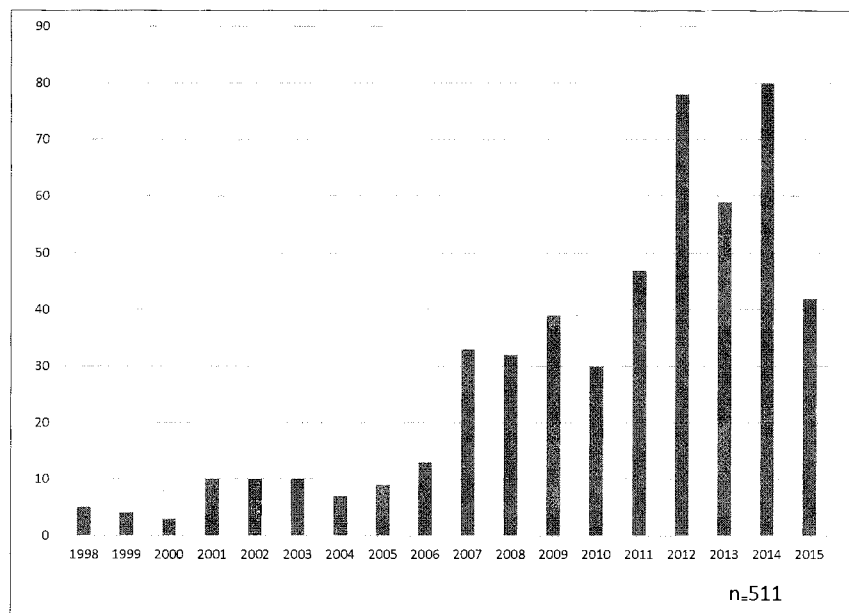


図1 リフレクション研究の文献数の推移

リフレクションの研究対象者別に分類すると、「教員」、「看護学生」、「臨床看護師」、「教員と看護学生」の4つに分類された。件数は、「教員」119件、「看護学生」82件、「臨床看護師」211件と「教員」、「看護学生」、「臨床看護師」の3つの対象の論文がリフレクションの研究の約8割(412件)を占めていた。(図2参照)

次にリフレクションの対象者別の論文数について年代別の推移を見ると(図2参照)、対象別の論文数は1998年に教員、臨床看護師対象の研究が発表され、翌年の1999年に看護学生対象の研究が発表されている。リフレクションの研究は、2007年より増加しているが、教員を対象とした論文が、同年の19件と増加したことが反映し

ている。2008～2010年まで年間30～39件の論文が発表され、その内訳として看護学生や臨床看護師を対象とした研究の増加が認められた。しかし、2015年には、年間42件と減少し、上記論文のうち、臨床看護師を対象とした論文も11件と減少に転じている。

次に看護教員を対象とした研究論文の論文種別による動向の結果を述べる。結果は図3に示した。看護教員を対象とした研究は図3に示したように、1998年から1件の解説が認められたが、以降年間0～2件と非常に少ない。会議録(抄録)についても2001年に1件認められ、以降散見される程度であった。しかし、2007年に年間16件と急激に増加し、以降年間2～11件が発表されて

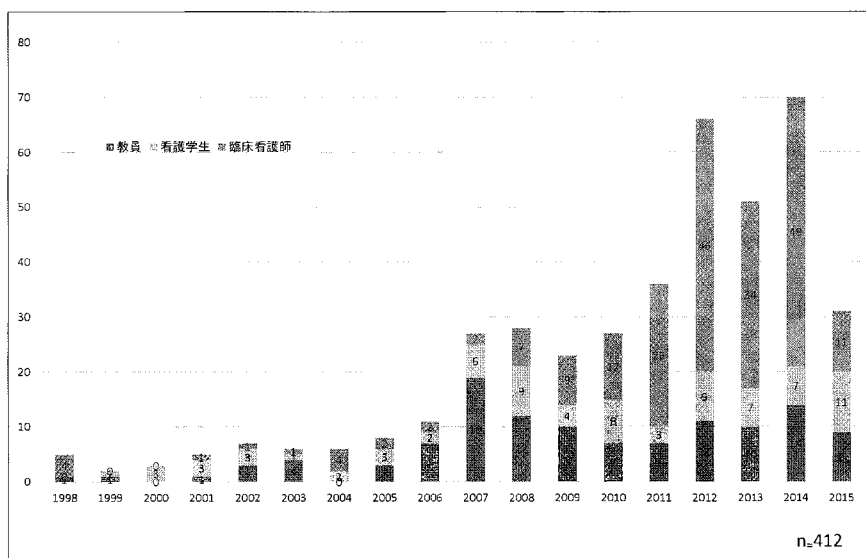


図2 対象者別によるリフレクション研究の論文数の推移

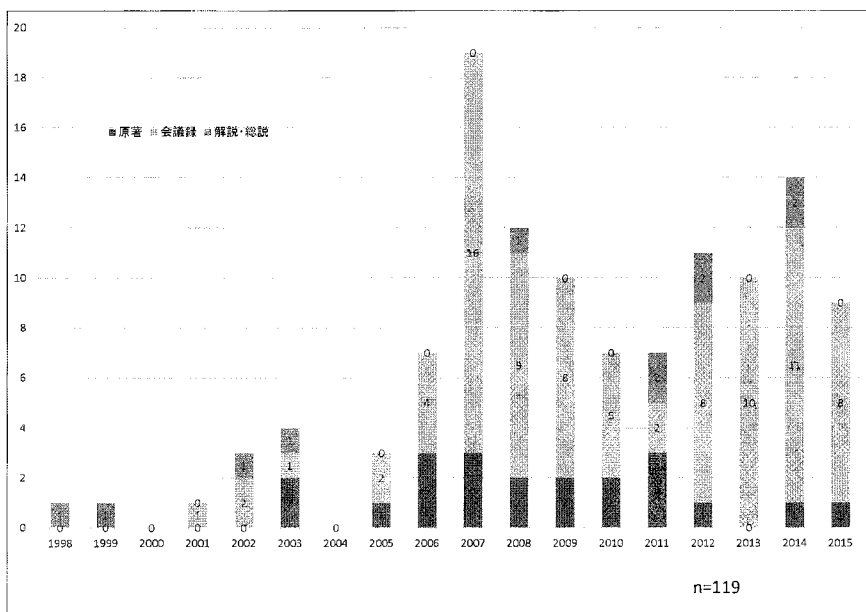


図3 教員を対象としたリフレクション研究

いる。原著に限っては、2003年に2件、以降年間0～3件が発表されている。以上から、看護学領域におけるリフレクション研究は、2007年以降論文数は急増し、2012～2014年にピークを迎えた。研究論文種別は会議録(学会抄録)が大半であるという傾向が見いだせた。(図3参照)

2. 看護教員自身によるリフレクション文献の内容

看護教員自身によるリフレクションに焦点を当て抽出された9件をリフレクションの方法で分類すると、「カード構造化法」3件、「リフレクションシート」4件、「半構造的インタビュー」1件、「会話記録」1件であった。(表1参照)

1) カード構造化法によるリフレクション

永井ら⁸⁾、佐藤ら⁹⁾、関ら¹⁰⁾の3件とも、目黒¹¹⁾が紹介しているカード構造化法を用いている。その研究方法は二分でき、カード構造化法によって作られるツリー図からキーワードを抽出し分析しているものと、リフレクションを実施した複数の授業者から得たアンケートをデータにして分析している方法であった。永井ら¹²⁾、佐藤ら¹³⁾は、カード構造化法を用いたリフレクションが看護教育においてどのような意義があるかを明らかにしている。この方法は、「自分の言葉で自分の授業を語る」という哲学に導かれたものであると永井ら¹⁴⁾は説明しており、授業者の語りを促進するプロンプターと共に行う方法である。研究結果として、佐藤ら¹⁵⁾は、リフレ

表1 看護教員自身による看護教育実践のリフレクション研究の文献

No	著者(発表年)	題名	研究目的	研究方法	結果(教員へのリフレクションによる効果、課題の記述)	雑誌名
1	関 義和ら (2011)	実習指導におけるリフレクションの有用性 2回のカード構造化法による意識の変化から	リフレクションを行ったことで教員にとってどのような影響がみられたのかが明らかになる。	リフレクション後のアンケートをカテゴリー化して分析	教員のリフレクションの感想からは、【自覚と気づき】【アサーション】【実習指導の方向性】【整理】のカテゴリーが抽出され、1回目は反省的な言葉が多かったが、2回目はその後の実習指導への足がかりを見出していた。授業リフレクションを繰り返すことで教員自身に意識の変化が起き、自己のあり様を考える機会となったものと思われた。	神奈川県立よこはま看護専門学校紀要 (1349-306X)7号 Page53-58(2011.03)
2	玉井 和子 (2011)	インタビューによる看護教員の授業リフレクションの研究(演習)における学生との関わりを通して	医療安全教養の授業(演習)においてインタビューを用いて授業リフレクションを行い、学生との関わりの中で授業者が経験していることは何かについて検討する。	面接内容を逐語録とし質的構造的に分析	演習における学生との関わりで看護教員が経験している内容は、【授業者として学生の直接体験の把握】【授業者として関わりの方角性を考える】【学生の直接体験への支援的意味づけ】【授業者として授業(演習)の気づきと発見】という4つのカテゴリーが抽出された。 教員がリフレクションをする効果は、「授業者としての自分の状況判断や意思決定過程をインタビューの中で自分の授業を第三者である他者に語ることで、自分の授業を内省熟考することになり、あらかじめ学生者としての学生姿が見えてくる」「インタビューにより、独力では気づけない授業者としての自分の気づきと自己の課題の発見は、力量を高めようとする意欲につながる」と述べている。	日本看護学会論文集: 看護教育(1347-8265)41号 Page135-137(2011.02)
3	森岡 優子ら (2009)	精神看護学教員の臨地研修におけるリフレクション 教員の自己教育向上をめざして	精神看護学領域を担当する講師1名と助手1名を対象に、臨地研修中の気になった場面と会話記録を書きとめてもらい、臨地研修後リフレクションした実践報告。	会話記録をカテゴリーに分類し、内容分析	リフレクションから自己課題を明確にするためには、事実状況と自己対話をありのままに記述・表現してゆくことが重要であった。リフレクションは、自己教育力の基礎となる自身や主体性についての自己点検に繋がった。実習現場との連携や関係との協力は、指導の力量形成と自己教育力を向上させる上で有意義であった。	湘南短期大学紀要 (0915-8138)20号 Page1-10(2009.03)
4	高坂 彰ら (2009)	授業リフレクションにおけるプロンプターの経験 学校全体で看護教員同士が授業リフレクションを行っていることの意義	授業リフレクションでのプロンプターの経験を明らかにし、教員同士でリフレクションを行う意義について考察する。	リフレクション後に記述した内容分析	授業リフレクションにおけるプロンプターの経験は三者三者であったが、「授業者が自分の言葉で語れること」を第一に考えリフレクションを進めている点では共通していた。また、教員同士がリフレクションすることで、自身の看護観・授業観を再認識する貴重な機会となっていることが窺えた。	神奈川県立平塚看護専門学校紀要(1880-6392)14号 Page26-30(2009.03)
5	佐藤 由理子ら (2008)	カード構造化法による精神看護学実習指導の授業リフレクション	精神看護学実習指導を授業リフレクションし、教員自身がどのように実習指導を見ているのか、その見方を明らかにする。	内容分析	印象カードに「学生はよくがんばったし、私もよくがんばった」と表現しているように、教員は実習全体の印象を肯定的に捉えた。印象カードを中心に両側に共通して出ているラベルは「学生への信頼」であった。さらに、ラベルの関係を分析し、「学生への信頼」と「待つ・忍耐」は、原因と結果の関係で、「待つ・忍耐」と「学生はよく頑張ったし、私もよく頑張った」も原因と結果の関係であった。リフレクションによって、教員自身が意識していなかった学生の見方として「学生への信頼」が見え、そのことが学生の成長を促すということが明らかになった。	日本看護学会論文集: 看護教育(1347-8265)38号 Page156-158(2008.01)
6	永井 睦子ら (2007)	授業リフレクションの導入による看護教員の経験 授業評価から授業リフレクションへ	授業リフレクションでの授業者の経験および参加者の経験を明らかにする。	リフレクション後の振り返りの記述内容を類似性のあるものに分類しカテゴリー化して分析	授業者の経験には「学生の反応」「授業者の伝え方のズレ」「新しい気づき」「指摘を受けない感覚」「肯定的な感情」「安心感」などがあつた。リフレクション参加者の経験としては、「アラスカのストローク」「今まで」「わかったこと」「参加したときの感じ」「実際にやってみないとわからない」「自分の授業を考える」などがあつた。授業リフレクションでの看護教員経験は、従来の授業評価とは明らかに異なっており、学内において看護教員同士が授業リフレクションを行うことを意図深いことが示唆された。	神奈川県立平塚看護専門学校紀要(1880-6392)13号 Page1-8(2007.07)
7	永井 睦子ら (2006)	カード構造化法による看護教員の授業リフレクションに関する研究	授業リフレクションが看護教員にとってどのような経験であったのか。その過程を明らかにし、さらに看護教員が授業リフレクションをすることが、看護教育においてどのような意味をもつのかについて考察すること。	内容分析	授業者は自分の言葉を手がかりに、自分自身の授業に対する感情や気がかりを自覚し、自分が目指す授業改善の方向性や自分が授業で大切にしていることを明確にすることができた。また、プロンプターの問いかけに自分の言葉で答えていくことを繰り返す中で、自分ひとりでは明確に意識できなかったことの気づきを得ることができた。	日本看護学会教育学会誌(0916-7536)16巻2号 Page27-34(2006.11)
8	齋藤 理恵子ら (2006)	自分と向き合っていく授業リフレクションを取り入れた授業研究会の活動を通して	2年間の授業研究会の活動を通して、メンバーとして参加した教員が得たことを明らかにした。授業研究会の活動を通して得たことから、校内で教員同士がこのような授業研究の場を持つことの意義について考察した。	リフレクションの経験から感じたことをフリーカードに書きだし、その内容を類似性に分類しカテゴリー化して分析した。	教員が得たことは、「新たな自己の発見」「新たにみえた学生の姿」「厳格なスキルを得たものは大きい」「永遠のテーマ」であった。専任教員が授業リフレクションの活動を積み重ねていくことは、教員が授業という現場のなかで、目の前の学生とかわり、その中で生きていくことを自分で確かめていくことで、新たな自己を発見することにつながり、授業の再構築や次時の授業改善につながるという。	神奈川県立よこはま看護専門学校紀要(1349-306X)3号 Page52-55(2006.03)
9	池谷 千佳ら (2005)	教師のリフレクションによる授業の改善	看護教員のリフレクションを繰り返して授業改善するプロセスを分析・考察することによって授業者の看護教育実践の意義や授業デザインを含めた課題を明らかにする。	リフレクションシートの内容分析。授業者とプロンプターの振り返りの内容分析。	一連のプロセスの中で他者評価や授業リフレクションを繰り返しながら教育実践を行うことで、教育的意義や課題の意識化がなされ、授業の改善に効果的であることが示唆された。	神奈川県立保福福祉大学実践教育センター看護教育研究集録(1349-8259)30号 Page45-52(2005.03)

クシオンによって、教員自身が意識していなかった学生の見方が顕在化し、そのことが学生の成長を促すということを示した。永井ら¹⁶⁾は、授業者は自分の言葉を手がかりに、自分自身の授業に対する感情や気がかりを自覚し、自分が目指す授業改善の方向性や自分が授業で大切にしていることが明確になると述べ、2件とも授業改善に意義があると言っている。さらには、授業者自身の語りを促進し授業者自身の語りに耳を傾けるプロンプターの存在の重要性について述べている。関ら¹⁷⁾は、実習指導におけるリフレクションの有用性について、授業者は、授業リフレクションを繰り返すことにより教員自身に意識の変化が起き自己のあり様を考える機会となったことで、実習指導への足がかりを見出していた。

2) リフレクションシートによるリフレクション

リフレクションシートによるリフレクションを実施した文献は3件あり、それぞれ研究対象者が異なる。斉藤ら¹⁸⁾は「授業者」、高坂ら¹⁹⁾は「プロンプター」、永井ら²⁰⁾は集団リフレクションを実施し、「授業者」「プロンプター」「(リフレクション)参加者」を研究対象としている。リフレクションシートは、授業者が自分に経験された“授業の流れ”を時間経過に沿って再構成するのに適したツール²¹⁾と目黒が紹介しており、3件ともに同様のものを使用している。

斉藤ら²²⁾は、授業研究会にリフレクションを取り入れ、授業研究の場をもつ意義について考察している。この研究はリフレクションシートの有用性について明記はされていないが、教員が授業リフレクションの活動を積み重ねていくことは、授業という場のなかで起きていたことを自分で確かめていくことであるとし、新たな自己を発見することで授業の再構築や授業改善につながると述べている。

高坂ら²³⁾は、プロンプターの経験を明らかにし、リフレクションシートを用いた教員同士でリフレクションを行う意義について考察している。その経験は、プロンプターは「授業者が自分の言葉で語れること」を第一に考えリフレクションを進めている点で共通していた。そのことは、授業者が誰かに意味づけられるのではなく、自分自身で意味づけることを大切にしていたことだと述べている。そして、プロンプターは、授業者の“身になって”授業者の意味の世界を生き、授業者と相互性の関係の中で、プロンプター自身も、自分の授業を見直す機会となり、「看護観・授業観」に立ち戻る機会となると示唆している。これらのことから、教員同士でリフレクションを行う意義は、教員が看護観・授業観を自分の言葉で語る力を要することであり、そのことを語り合える環境は、今後の授業改善に寄与すると述べている。

永井ら²⁴⁾は、集団リフレクションにおいて、授業者、

プロンプター、参加者の経験を明らかにしている。結果は、授業者の経験は参加者からプラスのストロークによって、「指摘を受けない感覚」「肯定的な感情」「安心感」から、自分自身で「学生の反応」「授業者のとらえ方のズレ」「新しい気づき」に意味づけして、次への授業への手がかりになったと考察している。参加者の経験は、これまでの授業評価では批判的思考であったのに対し、リフレクションではプラス面を見ていく感じを受けていた。その過程で、授業者の気づきを大切にすることの意味を理解し、参加者自身も「自分の授業を考える」ことになっていた。一方で、プロンプターの役割の難しさを述べ経験の場を増やすことが大切だと言っている。この3つの役割の考察から、従来の授業評価とは明らかに異なっており、学内において看護教員同士が授業リフレクションを行う意義は大きいと示唆している。

池谷²⁵⁾は、リフレクションを繰り返す授業改善するプロセスを分析・考察することによって授業者の看護教育実践の意義と課題を明らかにしている。その結果、教育的意義や課題の意識化がなされ、授業の改善に効果的であることを示唆している。

3) 半構造的インタビューによるリフレクション

玉井²⁶⁾は、授業者に対して半構造的インタビューを用いて学生との関わりを語ってもらい、教員の気づきを質的に分析している。その内容は、授業者としての自分の状況判断や意思決定過程をインタビューの中で自分の授業を第三者に語ることで、自分の授業を内省熟考することにつながり、あらためて学習者としての学生の姿が見える。その上、独力では気づけない自分の気づきと自己の課題の発見は、力量を高めようとする意欲につながると述べている。

4) 会話分析によるリフレクション

森岡ら²⁷⁾は、看護教員が臨地研修中において、気になった場面と会話を書きとめ「看護実践に埋められたリフレクションの構造」²⁸⁾を用いてリフレクションの構成要素である9つのカテゴリーに分類して課題の整理を行っている。その結果、リフレクションは自己教育力の基盤となる自信や主体性についての自己点検に繋がると報告している。

VII. 考察

1. 看護とリフレクションの研究の背景

リフレクションの論文数の推移(図1)と対象者別によるリフレクション研究の論文数の推移(図2)から、2007年と2011年～2014年に論文数が急激に増加していることがわかる。なぜこのような傾向を示すのかを考察すると2000年初頭から質の高い教育への転換が動きはじ

め、教育に携わる教員の教育能力の向上が求められる背景が大きく影響しているものと考えられた。

このことは文部科学省から出された「21世紀の大学像と今後の改革方法について（1998年）」²⁹⁾を受け、1999年には大学設置基準においてFaculty Development（以下FD）が努力義務化となり、2007年には大学院でのFDの義務化となった。それは、グローバル化時代に突入し、質の高い教育の提供のために、教育に携わる教員の教育能力の向上が求められたためである。看護系大学や短期大学、高等専門学校においてはFDの義務化はされていないが、1999年の大学設置基準の中に、改革の趣旨を受けた取り組みが期待されている。その結果、教員の教育能力を高めるための手法としてリフレクションが看護教育への導入が進んだものと考えられた。

もう一つの流れとして、厚生労働省の「看護基礎教育における技術教育のあり方検討会報告書（2003年）」³⁰⁾や「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書（2007年）」³¹⁾等の報告がある。ここでは、卒業直後の看護師の技術能力と臨床現場が期待している能力が乖離していることや、ヒヤリハット事例は新人看護師が関わる人が多いことなどが報告された。これらの報告を受け、2008年に看護師教育のカリキュラム改正が行われ、新たに統合分野の設定、在宅看護論や看護の統合と実践の臨地実習が導入された。2010年には「保健師助産師看護師法」および「看護師等人材確保の促進に関する法律」が改定され、新人看護師研修が努力義務化となった。さらに、2009年「今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書」³²⁾では、看護教員の看護実践能力と教育実践能力のどちらも必要であり、その両方を補うシステム作りが求められている。看護教員の継続教育として、看護師等養成所内でも、FDの一環として教員相互の授業参観やFDの義務化について検討する必要があると述べられている。

このような看護基礎教育や新人看護師を取り巻く状況の変化から、臨床看護師、特に新人看護師をリフレクションの対象とした研究論文が2011年～2014年に急増したものと推察された。

2. リフレクションの内容とその効果について

今回取り上げた9件の原著論文について分析した結果、リフレクションの方法の差異はあるが、全ての論文でリフレクションを実践することの意義や効果について肯定的に考察しているものであった。ここでは、9件の原著論文の内8件で実践されていた授業リフレクションの効果と課題、今後リフレクション研究を進めていくための課題について考察する。

1) 授業リフレクションによる効果と課題

看護教員自身によるリフレクションに焦点を当て抽出

された9件の原著論文のうち、目黒³³⁾の開発したリフレクションを行った8件の論文では、「気づき、自覚」「内省や熟考、意味づけの促進」「学生が見える」「自己効力感、肯定感」「授業改善」という共通の効果が述べられていた。

リフレクションによる効果の「気づき、自覚」とは、「他者からの指摘でもなく、批判でもなく、自分自身の納得できる気づきとなる」³⁴⁾ことである。また、「授業という場のなかで起きていたことを自分で確かめていく取り組みを繰り返すことで、新たな自己の発見が可能となること」³⁵⁾がリフレクションの効果として導かれている。つまり、授業リフレクションの効果の1つに自らの教授活動をふりかえり、捉え直すことが有益であること³⁶⁾ということが実践レベルで確認できることがあげられる。

次に授業リフレクションという手法に共通していることは、授業者が第三者に語るということである。授業者が、自分が行った授業を第三者に語ることによって、「自分の授業を内省熟考することにつながり、あらためて学習者としての学生の姿が見える」³⁷⁾、「意識していなかった学生の見方を意識する」³⁸⁾ことになる。学生の見方の変化とは例えて言うと、斉藤ら³⁹⁾は、授業の中では反応が乏しくみえた学生のが、リフレクションによって、学生は授業者からの投げかけに思考をめぐらせているように見え、「学生の持っている力に気付いた」と述べている。これらからリフレクションの効果として、他者に指摘をされるとやる気や自信を喪失しがちだが、本人が語ることによる気づきは、思考を柔軟にして見方が広がることがあげられる。

その効果を引き出すためには、授業者が自分の言葉で語れるためのプロンプターが存在することが不可欠である。プロンプターからプラスのストロークで対話が始められた授業者の体験は「『指摘を受けない感覚』、『肯定的な感情』、『安心感』」⁴⁰⁾のもとに、自分の教授活動や学生に対して「自己効力感、肯定感」が得られる段階まで到達するという効果が得られるからである。

一方で、高坂ら⁴¹⁾はプロンプターの経験から、授業者が辛い事実を引き受ける機会になった場合、プロンプターが指摘や勝手な意味づけをしないようにしていても、授業者には伝わらなかったことを述べている。それは、プラスのストロークを投げかけても必ずしも授業者の気づきを引き出せないことがあるということである。プロンプターの難しさについて述べている論文は数件あったが、プロンプターに焦点を絞って研究しているのは、この論文だけである。これらのことから、プロンプターの役割について研究を重ね、役割について明確化していくことはリフレクション研究における課題であるといえる。

今回、全ての論文において、授業者はリフレクション

することで全員が「授業改善」の方向性が見いだせたと述べている。大山⁴²⁾は、「大学教員がコースや授業デザインをするということは、学生の学習を十分に踏まえた上で、不安定な知識や新たな授業形態を操作的に扱いつつながら模索し、創りあげていかなければならないという困難さが伴っている」と述べている。授業リフレクションは、自分の授業に気づきを促進させるプロンプターが存在すれば、視野が広がり新たな自分と学生の発見ができる。そして、学生を理解した授業構築の方向性を見出すことができ、さらに自己効力感が高まることで授業改善の意欲が沸き起こる。つまり、教員が授業改善しようと自ら行動できることは、授業の質を高める方法と言える。このようなサイクルは教員・学生相互に肯定的な効果を及ぼすものと考えられる。

2) リフレクション研究を進めていく上での課題

わが国のリフレクション研究の第一人者である田村⁴³⁾によると、リフレクションの研究をするときには、質的な方法を採用することが多いとし、海外では現象学的方法論あるいは民俗学的方法論を用いた論文が非常に多くなっている。現に2006年を境に2007年から看護のなかではリフレクション研究が過去の数倍に増え、臨床・教育の場で盛んに実施されてきていることが確認できた。

しかしながら、今回研究対象とした論文の多くは授業リフレクションに関する研究であった。そこでは、目黒⁴⁴⁾が開発した、カード構造化法、リフレクションシートなどを質的に分析する手法が取られている。質的研究には普遍的なルールはいっさい存在せず、標準的な分析方法がないために、データや分析、解釈の信憑性を高めるための手段として、ピア・デブリーフィングやメンバーチェックがある。今回取り上げた6件の論文においては、リフレクション後にアンケートやフリーシートなどからデータを抽出して類似性に分類し解釈している。しかし、質的研究としてさらに分析や解釈の信憑性を高めることができれば、授業リフレクションの真実性が証明され、広く活用されるのではないかと考える。

一方で、リフレクション研究の目的自体が、個人や集団の経験や学びを明らかにすることをテーマとしているため、一般化を目指すことを目的としていない。そのことが影響し、学会等で多くの発表はなされるが、原著論文として取り組まれていないということに繋がっていることが考えられた。これがわが国のリフレクション研究の実態であるが、本研究で明確になったようにリフレクションの成果報告は数多くなされている事実はあるため、推奨されている方法論を用いた研究が報告されることが望まれる。

VIII. 研究の限界

1. 本研究においては検索キーワードを「看護」「リフレクション」「教員」としてリフレクション研究の絞り込みを実施し、研究対象となる論文を探索した。「リフレクション」というワードは、「内省」「省察」「熟考」「反映」など多くの訳語が存在している。しかしながら、これらの訳語を加えた検索は実施していない。そのため検索キーワードが結果に影響した可能性が考えられる。
2. リフレクションは、教育学の分野、特に教育工学系で研究されてきている。本研究ではあくまで看護学領域におけるリフレクションの検討を実施したが、教員という視野から幅広くリフレクションについて検討することも可能である。今後、看護学領域以外でどのようなリフレクションの活用や研究がなされているかを探求することを課題としたい。

IX. まとめ

1. 看護学領域におけるリフレクションに関する研究は2007年度以降、急速に研究論文数が増加し、2012～2014年には年間59～80件とピークに達している。
2. 看護学領域におけるリフレクション研究の動向は、FD研修の義務化・看護師新人研修の努力義務化が影響していると考えられる。
3. 看護教員自身によるリフレクションに焦点を当てて抽出された原著論文では、「気づき、自覚」「内省や熟考、意味づけの促進」「学生が見える」「自己効力感、肯定感」「授業改善」という共通の効果が述べられていた。
4. 個人や集団を対象としリフレクションを行い、個人の経験の捉えなおしとその変化を客観的に表現するには、分析方法の検討が必要である。

文献

- 1) Dewey, J. How We Think. Dover publication (1997b)
- 2) 東めぐみ：看護リフレクションという試み、VIVO vol. 28、36-40、(2011)
- 3) 田村 由美：理論・研究・実践を統合するリフレクション、看護研究、41 (3)、170、(2008)
- 4) 大山 牧子：大学における教員の省察を促すための枠組み、京都大学大学院教育学研究科紀要、(60)、495-507、(2014)
- 5) 藤井 さおり、田村 由美：わが国におけるリフレクション研究の動向、看護研究、41 (3)、183-196、(2008)
- 6) 上田 修代、宮崎 美砂子：看護実践のリフレクションに関する国内文献の検討、千葉看護学会誌、16 (1)、61-68、(2010)
- 7) 高橋 幸子、嘉手苺 英子：看護基礎教育の技術演習における学生のリフレクションに関する国内文献の

- 検討、沖縄県立看護大学紀要、(16)、97-107 (2015)
- 8) 永井 睦子、堀金 幸栄、池田 瑞穂、目黒 悟：カード構造化法による看護教員の授業リフレクションに関する研究、日本看護学教育学会誌、16 (2)、27-34、(2006)
- 9) 佐藤 由理子、前澤 尚子：カード構造化法による精神看護学実習指導の授業リフレクション、日本看護学会論文集：看護教育、(38)、156-158 (2008)
- 10) 関 義和、福田 里美、伊藤 幸子、石川 智子、福石 牧子：実習指導におけるリフレクションの有用性 2 回のカード構造化法による意識の変化から、神奈川県立よこはま看護専門学校紀要、(7)、53-58、(2011)
- 11) 目黒 悟：看護教育を拓く授業リフレクション 教える人の学びと成長 (1)、P. 36、メヂカルフレンド社、東京、(2010)
- 12) 前掲 8) 27-34
- 13) 前掲 9) 156-158
- 14) 前掲 8) 27-34
- 15) 前掲 9) 156-158
- 16) 前掲 8) 27-34
- 17) 前掲 10) 53-58
- 18) 齋藤 理恵子、目黒 会津子、合津 順子、沼井 智子、古賀 万美子、目黒 悟：自分と向き合っつくる授業 授業リフレクションを取り入れた授業研究会の活動を通して、神奈川県立よこはま看護専門学校紀要、(3)、52-55 (2006)
- 19) 高坂 彰、永井 睦子、宮河 いづみ、目黒 悟：授業リフレクションにおけるプロンプターの経験 学校全体で看護教員同士が授業リフレクションを行っていくことの意義、神奈川県立平塚看護専門学校紀要 (14)、26-30 (2009)
- 20) 永井 睦子、斉田 まち子、樋渡 明美、高坂 彰、目黒 悟：授業リフレクションの導入による看護教員の経験 授業評価から授業リフレクションへ、神奈川県立平塚看護専門学校紀要、(13)、1-8 (2007)
- 21) 前掲 11) P. 36
- 22) 前掲 18) 52-55
- 23) 前掲 19) 26-30
- 24) 前掲 20) 1-8
- 25) 池谷 千佳：教師のリフレクションによる授業の改善、神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録、(30)、45-52 (2005. 03)
- 26) 玉井 和子：インタビューによる看護教員の授業リフレクションの研究 授業 (演習) における学生との関わりを通して、日本看護学会論文集：看護教育 (1)、135-137 (2011)
- 27) 森岡 優子、内田 桃子：精神看護学教員の臨地研修におけるリフレクション 教員の自己教育向上をめざして、湘南短期大学紀要 (20)、1-10 (2009)
- 28) 池西悦子、田村由美：看護実践に埋め込まれたリフレクションの構造 マイクロモメント・タイムライン・インタビュー法の活用、看護研究、41 (3)、229-238、(2008)
- 29) 文部科学省：21世紀の大学像と今後の改革方策について 一競争的環境の中で個性が輝く大学一(答申) (平成10年10月26日 大学審議会) (2007. 10)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm、2015、11、25
- 30) 厚生労働省：看護基礎教育における技術教育のあり方検討会報告書 (2003. 3)
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html>、2015、11、25
- 31) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書 (2007. 4)
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/s0420-13.html>、2015、11、25
- 32) 厚生労働省：今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書 (2010. 2)
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0217-7b.pdf>、2015、11、25
- 33) 前掲 11) P. 20-68
- 34) 前掲 20) 1-8
- 35) 前掲 18) 52-55
- 36) 前掲 4) 495-507
- 37) 前掲 26) 135-137
- 38) 前掲 9) 156-158
- 39) 前掲 18) 52-55
- 40) 前掲 20) 1-8
- 41) 前掲 19) 26-30
- 42) 前掲 4) 495-507
- 43) 田村 由美：看護実践とリフレクション、日本看護学教育学会誌、17 (2)、61-74、(2007)
- 44) 前掲 11) 20-68

著者への連絡先：寺田智美

〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地

神奈川歯科大学短期大学部看護学科

TEL：046-822-9565 FAX：046-822-8787

Email：terada@kdu.ac.jp